
女神しか知らない恋の道!??

澪香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神しか知らない恋の道！？？

【NZコード】

N5478Z

【作者名】

澪香

【あらすじ】

平凡女子の天川奏と不良男子?の柳澤零が描く恋愛+SF+ファンタジーの学園ストーリーです

第一話 小さな出会い

キンコーンカンコーン

鐘の音が学校全体に響く

「今日は転校生が来てまーす」

加藤先生は勢いよくドアを開けながら言った

先生が黒板に転校生の名前を書いている。読みでみると柳澤零と書いている

「血口紹介よろつ」

「かみどう神道高校から来た柳澤零……です」

「神道高校？聞いたことがある……」

「神道高校ってあのヤバいくらい有名な？」

教室がザワザワしている

「静かに、零君は窓側の一番後ろの席ね……！」

「うそ……私の隣、じゃん殺されるって

さつき思い出したが神道高校は生徒のほとんどが不良で有名だった

「おまえ名前は？」

「さなり名前を聞かれた初対面なのにその言い方あり？」

「あ・・・天川奏あまかわかなでで・・・です」

「あつそ」

聞いてきたのそつちだろ あつそ って何だ

零は席に座ると授業の用意をしてる不良じゃないのか??

一時間田は数学だった

「おいつ教科書を忘れたから」と言ひ手を出す

えつ私に言ったの・・・そりやあ隣の席だしね・・・怖いよお

私は不良男子（零）に向かつて田を合わせずに教科書を渡した

「ありがとう」

不良に感謝されただぞ・・・おいつてか」おいつ本当に不良か??

「零つてやつ不良なの??かなつち」

放課後になると静川結花しづかわゆかが質問してきた

「知らないよ そんなの全く話してないし・・・」

「ええ～十回は話してたくさん～」

確かに十回は話したっていうか話かけられたからしかたなく・・・

「まいいや 帰りつか

朝 学校へ行くときは雨が降っていたが今は晴れていた

「ねえかなつち 神道高校つてお化けができるらしいよ

「ええ～お化けもいて不良もいるつて超ヤバいじやん

今日は私にとつては大きい出来事だったが世ひとつでは小さな出来事でしかなかつただろう・・・

第一話 女神に会っちゃった！？？

今日は晴れだつた不良男子（零）に会つてから晴れの日が続いている

てる

いつものよつと学校へ行く用意をしていた

異変に気づいたのは顔を洗つてゐるときだつた

「そこの娘・・・」めいかいはどこでんかいじや、冥界か天界か？？

私はビックリして顔をあげると鏡には私の顔に似ている人がうつ
つている

「だ・・・誰・・・家には私しかいないのに・・・」

私は後ろを向く・・・誰もいない ていうか冥界つて何？天界つ
て何

「わらわはアポロンじゃ お主は・・・」

アポロン？冥界？天界？何それ？？？？？

「わ・・・私は天川奏・・・」

「奏？？もしやここは人間界にんげんかいか？？」

はあ？？何だこいつ人間界？人間が住んでるのはあたりまえだろ

「人間じゃなかつたらお前は何者なの……」

「わらわは女神じゃ 天界の者じゃ」

天界の女神？？アポロン？？あれ？？ギリシャ神話で似たような事を聞いたことがあるぞ

私はふと時計を見る 7時35分

「ヤバッ、学校に遅れちゃう・・・」

アポロンだかも気になるが今は学校へ行かないと・・・

キンコーンカンコーン

学校の鐘の音が聞こえる

私は急いで階段を駆けている

2年生の教室は3階なので、もう息がハアハアしている

2年B組の教室の前に来るといつたん止まって息を整えた

「遅れてすみません！！」

教室中に私の声が響きわたった

教室を見ると誰もいないように見えたがよく見ると一人の男子が学校の用意をしている

「 ょお奏お前も遅れたのか」

声でわかつた不良野子の零だ

「 しかたないじやん……こりこりあつたんだかい」

「 女神に会つたとか?..?」

え・・・何で知つてんの?..家には誰もいなかつたし・・・

「 なんでわかつ・・・そ・・・そんないとあるばあなこじやん・・・

」

「 やつぱむ前 瞞つけないんだな」

へ?..もッ 意味わかんなじよ・・・

「 お前には女神が見えるんだろ」

?..まだ一人しか見たことないもん!

「 まだ一人しか・・・眞みえるんじやないの?..」

また口がすべつた・・・

「 真みえるわけじやねえよ」

「 何でやつこいつ事しつてんのよ」

ああ言つねやつた・・・

「俺は小さいときから神や女神が見えるから」

第二話 零の秘密

「小さいころから神や女神を見ている…？？」

なにを言つてるんだ・・・実際に女神とか神とか・・・まあ見ちゃつたから信じるしかないか

「どうして零は神とか女神とか見れるの？」

「俺は普通の人間じゃないから」

はあ？？？普通の人間じゃない？？だつたらなんだつて言つんだよ

「どんなふうに普通じゃないの？？」

「まあ簡単に言つと天界で生まれたから」

天界で生まれた？ただそれだけで神や女神が見れるのか！？？

「俺は天界住人のアイリスと人間界の人間の間から生まれてきたんだ！！」

アイリス？？なんだそりや？？

「アイリスって？？」

「アイリスは虹の女神だ」

虹？？そついえば零と出会つてから毎日のように晴れてい

しかも雨が降ったわけでもないのが毎日のよひに出てる。

「じゃあ最近毎日のよひに晴れて虹が出てるのか、そのせいかの
一。」

「まあそりだナゾ・・・へこうか一時間の体育ついてしまって
のへ。」

「あーーー、それでたーー！」

「ひじてこの話は終わることになり零の秘密も少し分かったので体育
の用意をはじめた

第四話 女神について！？？

「ねえねえなんで遅れたの？？」

急いで体育着にきがえて校庭に出た私にむかって静川結花が言った

「ハアハアいろいろ・・・あつたの」

走ってきたので息があらー・・・

「いひいひって何？？」

女神を見たなんて言つても信じないよな・・・

「寝坊したのーーー！」

さあ初めて嘘ついたよお結花・・・、ermen・・・

「そりなんだ・・・って嘘ついてるでしょ顔にでてるーーー！」

「なんでわかつ・・・嘘なんかついてないもん・・・

「やつぱり、かなつちが嫌なら聞かない・・・」

「うう・・・」

「いいよ、かなつちが嫌なら聞かない・・・」

涙目になつた私にむかって結花は優しい笑みをむけて言った

「ゴメン・・・」

「いいよ気にしないから」

結花は小学校のころから優しかった・・・私があんなことになつてもいつも見方でいてくれた・・・

それから毎休みになつた・・・

「朝の話は秘密だからなー!」

後ろから声がした・・・零だ!!

「朝つてあの女神の話??」

「それいがいなんかあつたか??」

そんな事いわれても・・・

「放課後にその話の続きを話したいから残れよ

えつれつきので終わりじゃないのぉ~

「う・・・うん、わかった」

放課後・・・

「よし誰もいないな・・・」

零は教室に一人しかいないのを確かめて言った

「なんでそんなに警戒してるの??」

「冥界のやつが見てたり聞いてたらヤバいから・・・」

「冥界・・・そりこえれば冥界についてはなんも聞いてないな・・・

「よし!・・・じゃあ神と女神についての話からするか・・・

「うん・・・」

「まず、神と女神は愛の力が源なんだよ・・・」

「愛の力!??

「なんで私には女神が見えたの??」

「おまえに好きな人でもできたからじゃないのか??」

「好きな人・・・零・・・ちがうちがう

ピンポンパンポンみんな帰りましょう

「あつ明日ね・・・」

はあなんでこんなタイミングに・・・

第五話 奏の秘密？？？

やばい、やばい、やばい何でこんなタイミングであんな事を思い出したの・・・

私は廊下を走つていると結花がすれ違つた・・・

「かなづちへどりしたの？？？」

・・・結花「メンもう終わつたことなのに出で出すと涙が止まらないんだよ・・・

「結花・・・こないで・・・・

私の声は廊下に響きわたつた・・・

学校を出るとさつきまで教室にいた零がいた

「じつしたんだ？さきまで泣いてなかつたのに

「か・・・関係ないでしょーーー！」

「幼稚園のときのか？？」

「……なんで」つがその事をしつてるのー？？

「そ・・・そりだよ・・・」

もつかたないな・・・

「ちよつと昔の事を思いで泣いてただけだから・・・セレビにてよー。」

「ヤダね・・・」

「な・・・・ゞ／＼のもできなにの――」

「まだ話は終わってない……」

「そ・・・そんな理由で・・・」

「その幼稚園のときの事と関係があるんだよ！――！」

「はあ？？何言つてゐの？？？」

私は泣きながらも話す・・・

「…にじめられてたんだろ！…」紺花つてやつて…

まっすぐに言わないでよ・・・

「あのときも今も結花は変わつてない・・・」

私は泣くのを我慢しながらも声はふるえていた

—あいつのなかには悪魔・・・お前のなかには女神がいるんだよ・・

•
L

第六話 あらたな不思議??

零にあんな事を言われたが嘘だと思い零をおして走り帰った

家 5時15分

「う・・・うう・・・」

私はあの事（こじめられてた事）を思い出すと自分が止められない

ピンポーン

今日は留守のふりをしようと思つたが何回もなつてうるさいのを
しかたなく出る」とした

ピンポーン ピンポーン ピンポーン・・・

私はドアを開けたそこには結花が立つてた

「なんかあつたの??かなつち??男子になんか言われた??」

結花は私のことを見ながら言った

「『メンちょっとね・・・』

私は作り笑顔で二口と笑つた

「そ・・・そう・・・」

結花は最後こうつて言つて帰つた

しづらしくあるとめた・・・

ピンポン・・・

さすがにもう泣きあわつたので出た

「よつ、さつき結花きただる」

零だった、こつは不良男子と言われ友達があんまりいないやつだ

「やうだけど何？？」

「こやあチャイム鳴らしたりとしたら結花がきてさあ・・・」

「あひへびひしたのっ？」

「・・・ちよつと待て・・・」

零はやつこつて勝手に家にあがつた

「みや・・・何勝手にあがつてんのよ

「いや、この家に魔法陣を使つたあとがかかるから・・・

「

零はやつこつて何か呪文のように何かを言つている

「なんてこつてゐの？？」

やう言つたが零は無視する

「・・・」

怒りようがない逆に言えば啞然していた零の周りには赤い何かがボツと出でている・・・

「結界か・・・」

結界つて何？？あのアニメとかであるシールドみたいなの？？

「」の家や、奏が普段つかつてゐる物すべてに結界がはつてある・・・

「

何を言つてゐるの・・・誰がはつたつてこいつの？？？

「だ・・・誰がはつたの？？」

私はよくわからないがなんとなく質問してみた

「わからない・・・でもかなり強い魔術だ何年ももたない術なのに10年はもつてる・・・」

魔術！？？10年？？さっぱりわからない

「奏の家族の写真つてあるか？？」

「え・・・あ・・・うん、あるよ」

お母さんはだいぶまえに死んでお父さんは仕事で大変だった

「これでいい？？だいぶ前の写真だ」

零にそれを見せると零はびっくりしているようだ

「どうしたの？？」

「…」・「これは力オス殿！？？」

「力オスって誰？？お母さんは天川未来あまがわみくだよ」

「奏のお母さんは女神の中で一番最初の方なんだよ・・・」

第七話 裏切りと眞実

「奏のお母さんは女神の中で一番最初の方なんだよ……」

私は零が言つてゐる意味がよく分からなかつた

「よく分かんない……くわしく説明して……」

「うへんくわしくつて奏のお母さん『カオス』がセカイの始まりつてことかな……」

お母さんがセカイの始まり??

「まあそのうち分かるから……そうだ鏡……鏡」

「なんで鏡さがしてるの?」

「あつあつたこの鏡に奏の顔をつつして……」

「またお主か……まあとりついてしまつたからしかたがあるまい」

鏡につつた私が言つていつか顔とかちょっとちがう

「零……もしかして私にいる女神つて……」

「そう……この方はアポロンつて言つて音楽・予言・弓矢・牧畜の神だ」

疲れて幻を見ていたと思っていたこいつが女神だったとは……

「でもなんで私なんかに・・・」

「こりねーよ そんなの遺伝子的じゃないか?」

「お主らアーヴィングのとくまぬがここから逃げたまづがいいのでは
??.?」

「?.?.何を言つてゐんだ??.?」

「こべぞ奏・・・」

アリスと零は私の手をグッと握り合って、外へ出て学校のまづく
走る

「零どうしたの??.なんでアポロンが言つた」とで逃げてるの嘘か
もしけなこじやん」

零の手が温かい・・・

「嘘じやないかもしれないアポロンは云々の神でもあるのだから・

・・・

「それは分かつたから手 はなしてよ・・・」

私は顔を真つ赤にしながらあわてて言つた

「俺の足の速さにこひこられるなこひこけどな

やうこひと零は手をはなす私は走るのをやめやうになつたけど頑

張つて走る

「学校だつたら大丈夫だろ」

そういうと見覚えがない学校??のなかに入つていった

「ま・・・待つてよ」

私は全力で走る零は階段をかけあがり3 - Aの教室に入つていった

「な・・・なんでこんなところに逃げたの・・・」

「なんでつて・・・」

零は言葉を中途半端にしながら真剣な目になつた

「ミシケタ」

かすかに聞こえたロボットかのような感情のない声

「ででこ」よ 悪魔

零が教室中いや学校全体に響くくらいの声で言つた

「悪魔つて・・・」

「冥界のいや・・・地獄の住人じや」

私が片手に持っていた鏡にうつるアポロンが言つ

「敵2人・・・女・・・女神iriと神と人間まざりの男・・・」

今度は女の声がした・・・聞いたことがある声

「敵は1人か・・・」

零が言った

「なんで・・・敵は2人じやないの??」

「いや、敵は1人じや悪魔は人間にとりつく

「そう・・・もし悪魔が2人だつたら悪魔がもう復活している事になる」

私の質問にアポロンと零が答えてくれた

「メガミ・・・カミ・・・コロス」

どこからか聞こえてくる声・・・

「ユカ・・・トモダチヲコロスケドイイカ」

「ええいいわよはつきり言えば偽友だから・・・」

暗闇からゆっくりと出てくる1人の女

「ゆ・・・結花!??」

「ああ奏か・・・ゴメン前から嫌いだつたんだ」

結花は満面の笑顔で言つた

「う・・・嘘だよね・・・」

「御用書」

零が大きな声で言つた

う…………嘘だよ…………ね

私の目には涙が

「やへき俺がお前の家いつたときに結花が舌打ちしてたしな・・・」

零が私を説得するように言つ

—そ・・・そんなん

「さつさとこんな人生を終わらせたいならこっちに来てすぐらくにしてあげるから」

結花はさつきから満面の笑顔だ・・・

「じゃ・・・じゃあ幼稚園のときの気持ちは嘘だつたの??」

「 ましょ 」
「 そう何年我慢してたと思つてんの?..まあいいわれりやとばじゆ

「はじめるつてなにを・・・」

私はもう泣いてなかつただつて零やアポロンがそばにいてくれた
から

「戦争を・・・戦争を始めましょ」

結花は不気味な笑い声とともに言つて暗闇に消えていった

「奏・・・今からは戦いがはじまる・・・アポロンは全く力が戻つて
ない・・・今から落としていいか」

零は真剣な顔で言つた

「落とすつて何を」

「とべかく皿をつぶつて・・・」

私が皿をつぶると私の唇にほやわらかいなにかがあたつてこむ

びつくりして皿を開けると零の唇だった

「なんじゅ無理くじゅう零たしかに奏の好きな者はお主じゅが・
・・」

「いいじゃないですか俺もあいつの」と好きなんだから

「まあいい話はあとじゅう」

アポロン
私の頭には天使の輪のようなものがあった

「おおこんなキス一回でこんなに力が戻るとはお主は天才じゃなあ」

「つむぎこな……ゼスと呼ベゼスと……」

「ほうお主はゼウス殿の子ではないかー？」

「もうだ……」

「あら神々ビーヴーのお話中ですみませんがもうはじめていいかしら
？」

「ああ臨むといひだ……」

第八話 大人な遊びしませんか??

アポロンへ

今わらわは学校とやらにゐる・・・」」は戦場じや

「女神と神もどき・・・ふふ・・・すぐ樂にしてあげますわ」

あの結花とやらは不気味な笑顔で不気味な笑い声をたてながら言った

「」はダメじゃ・・・校庭まで逃げないと死ぬぞ」

わらわの予言では学校全部破壊すると出た

「わらわは東門からゼスは西門から・・・」

わらわとゼスは同時に走り出しふたてに分かれた

「クッやはりこちらにも敵の手が・・・」

わらわの東校舎のほうにはトゲのトラップが多く仕込んであつた

「ふふ・・・校舎から出るまえには殺せそつ ふ・・フハハハハハ
ハハハハハハハ」

どこからか聞こえてくる悪魔の声は不気味さを増している

「わらわはこんな簡単なトラップでは死ないぞ・・・」

わらわの声も学校中に響きわたり

「おう……」んなとこりで死ねつか

ゼスからの返事が聞こえた

「そろそろウオーミングアップは終アジヤコツも通つてこいつではな
いかお主もそうではないかゼス」

わらわは術を使って矢を出しへリップを一つ一つ確実に射る

「やうだな・・・負けてらんねえー」

ゼスのまづからば魔法陣のヒカリが見えた

「クッやはり本氣で叩かないと死にそうにもなんなんわ・・・おい
つあれで一発で殺せ」

「フハハハハハ オヌシモホンキテイクノジャナ」

小さい声だつたけどかすかに聞こえたたぶん屋上あたりにいる・・

・

大きな魔術の気配を感じた・・・わらわはゆづくつ外へ出た

「出口じゅ・・・」

「ヤアヒサシブリダナ アポロンオヌシハマツタクカワツテナイ」

わらわの首にはナイフ・・・目の前には人間の姿だが声的に悪魔
だろう私があつたことある悪魔

「クニが・・・」

クニとはずつと昔わらわの力が完全だつたときに戦つた悪魔

「フハハハハアノトキオヌシニマケテカラワラワハカワツタヅマジユツモツヨクナツタシナ」

よく考えるとクミも完全に復活していないように思える

「じゃあ殺してみた、「ンゲンを」

不気味な笑い声をたてながらクミはナイフを首めがけて動かした

一ダメ人を殺しちゃ・・・絶対ダメ

そのとき一人の女の声が聞こえた・・・。そう悪魔は悪魔でもこの人間とつながってるそして感情も・・・。

激しい叫び声・・・

「す・・・すみません『メンなさい』」

「お主は謝るな・・・つらい思いをしてきたんだろ・・・」

そういってわらわは瑠奈と言つ女をだいた女の目からは涙・・・

「ありがとうございます・・・ありがとうございます」

それから女はどこかへ帰つていった

奏(

「なんであるときあの子がつらい思いをしてきたのが分かったの?」

?」

私は鏡にうつった私に聞いたアポロン

「あのな女神や神は愛の力で復活するが悪魔は不幸の力で復活するのじゃ!!--

「不幸の力・・・それなら分かるか・・・

零(ゼス)

俺は痛みを我慢しながら魔法陣を書いていた

「ハアハアハアハアハア」

俺の腕や膝・・・いろんなところから血が大量に出ている・・・

「フフ所詮人間ねこつちは殺せそつ

廊下に不気味な声が響きまるで洗脳状態だ

「で・・・できた」

俺が書いていた魔法陣はテレポートができる魔法陣だった

「時空の神よ 俺をG市N学校の校庭へ・・・」

魔法陣がヒカリだし気がつくと校庭にきていた・・・そこには女
が一人たつていた

「どうしたの？？大丈夫？？」

血は止まらずダラダラと流れている・・・

「さつそく悪魔入り女か・・・」

「ヨクワカツタナ・・・マアツチトチガツテカンタンニコロセソ
ウダナ」

あつちはうまくいったのか・・・

「魔法陣種第24番機・・・抹殺の玉・・・悪魔・・・死ね」

俺の目の前にはグロテスクな光景が広がっている

「まあ女さえ殺さなければいいのだからこなんんでいいだろ」「ひ

奏へ

「零？？大丈夫？？？」

私が校庭に行くと血のたまりがあつた零に聞くと

「俺の血だ」

という・・・そのわりにはけがした場所が少ないし、出血も止まつていて

「そりなんだ・・・」

「ちっやられたか・・・わたくしが手をくだすのはもう少し先にしましよう」

私達が屋上を見ると黒い翼のカラス達が集まり不気味だった

次の日・・・

私は結花のことがあり学校に行きたくなかったが零もいるので行ってみた

キンコーンカンコーン

加藤先生がドアから入つてくる・・・最初に口にした言葉それは

「結花さんは転校しました」

教室がざわめきで包まれた あとで先生に聞いてみた

「どこのへ転校したのですか?」

先生は困ったようにして行った

「それがわかんないんだよね・・・家は売り出されて、今考えると家族の顔見たことないのよね・・・」

「そうですか・・・」

私がそういうと先生は何か思い出した口調で言つた

「やついえば下駄箱にね入つてたの・・・」

「何が入つてたんですか? ? ? ? ?」

「カラスの羽よ・・・しかも何枚もよーーー!」

カラスの羽・・・もしあの出来事のあとに学校に来たのなら・・・

そのときだった・・・放送のチャイム

「ピンポンパンポーン この学校は私達が支配したーーー!」

第九話 あらたな敵！？

「ピンポンパンポン」の学校は私達が支配した……

学校中はザワザワと荒れている・・・

「どうせ演劇部が放送部の練習だろー！」

などと放送が嘘だと言つてる人がほとんどだった そのときだつた教室のドアが開いた

「始めてー 黒い鳥の黒羽でーす ここに女神と神もどきつてい
るう？？」

ブラックバード・・・ 黒い鳥・・・ カラス・・・ 結花！――！

「あつれーゆかりんの情報だと『なんだけどなー出てこよクラ
スの全員を殺してもいいんだぜ』

黒羽こうやつはたぶんだが結花と同じグループの者なのだから・・・

「はあ？ そんなやついるはずねえだろーー！」

クラスの男子はこうつてている

「危機感がないやつらね・・・」

そういうと黒羽は男子一人を捕まえ首に手を近づける男子は零だ

つた

「魔法陣種第32番機・・・破壊の渦・・・」

「ぼそりと零がつぶやいた黒羽の周りを囲むように魔法陣が作られていいく・・・

「フハツ自分から出でくるとは光榮だね・・・魔術種第21番機・・・狂歎車・・・」

黒羽がそう言つた瞬間・・・魔法陣がパズルが狂つたかのように崩れていった

「チツ・・・」

零は舌打ちをして黒羽から離れた

「アポロン・・・お前もほうが力あるだろ」

零はそう行つて私からアポロンに変われと合図する

アポロン

「なんじゃゼスわらわに協力せよと・・・まあ良いが」の服は動きづらいぞ

わらわはジー・パンとならを描きしながら言った

「じゃねーよ ちょっとこいつらを倒せばいいだけなんだから」

「しかたない天界術式第44番・・・罪と正義の分かれ目・・・」

わらわの手には天術のかたまりでできた刀で黒羽にたちむかつた

「魔法陣種第25番機・・・神の鉄槌・・・」

ゼスはギロチンの刃でできた刀でたちむかつ

「ふふつやつと2人でましたわね・・・死になさい」

黒羽がそう言つた瞬間に教室からはツルのよつなものが出てきた

「なつクラスのみんなを殺す気か！？」

零はクラスのみんながいるのに気づいていた

「フハハハハハ」いつも道具として使わせてもらひ

そういうヒツルのようなものは止めがけて動いてくる

「キャ-----」

ツルは皆の体の中心をつらぬいていた皆の体からは大量の血が・・

「やいやめ！」んな悲しご思いをするのは私で十分」

私はアポロンから自分の意識を奪い取り必死に叫んだ

「 フフ言つたわね じゃあ遠慮なく 」

そう言つとツルのすべてが私の体めがけて動く

「奏！！！」

零だった零は刀を使いツルを確實に切っていく

クラスの皆が私のところに近づいてくる

「やめてやめてやめてやめて嫌嫌嫌嫌もう昔みたいに一人はヤダヤ
ダヤダヤダ」

アポロン

「お主、友達をこんな目にあわせようと、ただですむと思つな。天界術式第1番、幸運と不運の境、」

クラスの者はみなバタバタと倒れていく・・・別に殺したわけでもない眠らしたのだ

「チツやはり人間は使えない・・・この学校ごと死で埋めてやる」

ツルはどこかへ引つ込み黒羽はどこかへ行った

「ソニーは離れよう・・・」

体力を大幅に消費したわらわには今予知は使えない・・・

「だが学校の人々が・・・」

ゼスはそう言って反対意見を出した

「何を言つておる・・・もし神と女神がそれなりに力を取り戻せれば簡単の事ではないか」

わらわはこう言い残し奏へ変わつた

奏へ

「え・・・あ・・・」

私はいきなりアポロンに言われたのでどうすればいいのかとまどつていた

「あ・・・あのさ前から好きだった・・・」

「え・・・い・・・今・・・」

「お前のことが好きなんだよーー」

私は顔が赤くなつた・・・好きな人に告白されたのは初めてだ・・・

「あのおー良いムードのところすみませんが私・・・協力しますよ・・・」

そこには腰のあたりまで伸びてる茶色の髪の毛でいかにもモテそ
うな女の子がたつていた

「わ・・・私・・・水谷葵^{みずたにあおい}つて言^いります・・・あの・・・その女神
が入つてます・・・」

「め・・・女神入り!-!-」

私と零は声をあわせて言つた・・・この学校にまだ女神入りがい
るとは思つていなかつた

「まあメンバーが1人増えたしさつさとみんな外に・・・」

「はい!-!-」

零が言い終わるまえに葵さんは返事をした・・・なんか不思議な
子・・・

「(+)に女神と神の力あり・・・この人々の愛でみなを助けたまえ・
・・・」

そういうて目を開けると私達は校庭にいた もちろんクラスの皆
もだ

ドッカーン

それは校庭に出ですぐのことだつた激しい爆発音がし学校が崩壊していく

次の日

学校から電話があつた学校は新しく建て学校ができるまで休みだ
といつ

「しばらく零と会えないのか・・・」

さりに零の皆田のせいがアポロンには翼がはえた

プルルルル

ケータイの呼び出し音がなつた だれだろつ

「誰で・・・」

「た・・・助けて」

その声は葵さん以外誰の声でもなかつた

第十話 奏が・・・

「た・・・助けて」

「な・・・どうしたの・・・」

「M地区の旧校舎で・・・」

そこで電話は切れた私は夜で雪が降ってるのを無視してM地区的
旧校舎にむかった

「葵さん・・・いますか? ?」

旧校舎は昔、神道高校だつたらしいとても暗く怖いしかも迷路の
ようこの道がたくさんあつた

「きや――――」

葵さんの叫び声が聞こえた私は迷路のような廊下を走り一つの教
室のまえで止まる

「オカルト研究部・・・」

私はゆっくり教室のドアを開けた・・・だがそこには人間の影な
んてどこにもなかった

「葵さん?」

私はゆっくり教室に入った

「遊びませんか？」

後ろから声がした振り返ってみるとそこには骸骨がたつてた

「椅子取りゲーム・・・やらない??」

すぐ怖かつた・・・

「は・・・はい」

私は思わずイエスといってしまった

「ルールはこうだ勝つた人の言つことをなんでも聞く・・・

勝つた人の言つことをなんでも・・・

「そりなんでも・・・な・ん・で・も」

骸骨は私の思つてることを完璧にあてた

「わかつた・・・やる」

地獄かのような椅子取りゲームがはじまつた・・・たくさんの人形達を相手にやるのだから

「ククク」

不気味な笑い声をたてながら骸骨が勝つてしまった

「じゃあ命令するよボクの仲間になれーー！」

「骸骨の仲間・・・」

考えただけでゾッとした

「ちがうちがうボクはブラックバードだよ

「ブ・・・ブラックバード・・・」

「そうブラックバード・・・フフフ君が賭けにのつたんだ

「嫌だ嫌だ仲間を裏切りたくない

「約束を破るのかい・・・じゃあこいつを捕まえろーー！」

骸骨がそう言つと私の周りを人形が囲んだ

「われわれは天界を壊すことではない・・・新世界をつくるのだよ
新世界をーー！」

骸骨のその言葉を最後に私は氣を失つた

「ハハはははーー！」

「おつお田覚めかい？」

周りを見るとお城のようにきれいな部屋だ・・・王の席のような
ところには骸骨が座つてる

「うるせえ……だ」

「フフよくぞ聞いてくれた！」私はブラックバードの秘密基地だ……」

「秘密基地なのにこんなにでっかいつて……」

「秘密基地だよ……だつて本部のほうがでっかいんだから」

・・・今思つたんだが動けない・・・足も手にも何もされてない
のに・・・

「ああそれは魔術だよ」

「ま・・・魔術」

「あ・・・葵さんは」

「あああれは偽者・・・すごいだろ魔術といつのは」

骸骨は不気味な笑い声をたてながら言つた

「お前はこの組織のなんなの・・・」

私は質問をしてみた

「フフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフ
フフそのうち分かるぞ」

ちょっと不気味だつたいつもよりも・・・

「おいこいつを洗脳室へ連れてけ
骸骨は私を指さしていった

第十一話 奏の危機

「お、こいつを洗脳室へ連れてけ！」

骸骨は私を指さしていつた

アホロン・・・

私が読んでも何も反応がなし。。。

あああの女神かお前から出させでどかしゃたそ

骨骼が答えた。・・・和は今一人・・・

そこは鉢かなくさん置いてある不思議な部屋が二つ

零

俺は奏に電話を50回以上かけてるが全部留守と言う

「なにしてんだ奏・・・」

俺が電話を壊しそうになつたとき窓が鳴つた
ドンドン

窓を開けると巫女のような人がうついていた

「ゼス……奏が……」

「アポロンか……」

俺はアポロンから奏の状況を聞いた

「奏がブラックバードに……嘘だろ……なんで奏を守んなかった」

「あそこに入るのは私には無理……全面的に魔術で入つたら私はもひこにまいない……」

「まあいいとにかくそこにつれてけ……」

俺はそつこつてコートを着て外へ出た

「どうちだよ

「あつち……G公園のところ

「よし行くぞ……」

第十一話 洗脳少女VS不良男子

零(

俺がブラックバードの秘密基地？につくとそこには人間の影が

「きたか・・・フフ・・・・」

ブツブツと不気味に何か言つてゐる女性だった

「奏はどうだ！？」

「奏？あああの子・・・フフ大事な人を助けに来たつてわけ・・・でももう遅いよ」

女は不気味に満面の笑みをうかべながら言つた

「ここを通してもらひ・・・魔法陣種第22番機・・・コロロの針・・・」

「フフそれはわたくしに戦えと・・・そう考えていいのか？」

「ああ・・・」

女の顔からも俺の顔からも笑みが消えた

「だがわたくしに勝つたとしてもお前らはここに入れないあの子が自分から出でこないかぎり会えないわね」

「今すぐG公園に来い……」
「え……あ……どうしたんですか？零さん」「緊急事態だ……奏が捕まつた」

「奏さんが……はい……いますぐ行きます……」

「かな……」

「ダメレ」

「その言葉には感情がなく奏らしくない口調だと思った

「ココデオマエララコロス……天魔術式第99番機……死神と女神の微笑み」

「奏……チツ……」

「俺は舌打ちをしあいつが来るまで奏を殺さず耐えるといつ決断を

した

「モウナニモカモイラナイ……」

「奏はボソッとやうじうと俺のそつへ走つてくれる

「シネ・・・デキソコナイノカミ・・・」

「魔法陣種第14番機・・・無限の盾^{インヒヤーリッシュテシールズ}・・・」

「これでしばらくは耐えられるだろ？・・・俺の周りには盾がはら
れそこに奏が突っ込んできた

「ロロスロロスロロスロロスロロスロロス」

「クッ」

強い・・・盾でガードしているがそれでも痛みが伝わってくる・・
・あの短時間にどんな事が・・・

「プシュケーサマノケイカクヲジャマサセナイ」

「プシュケー？計画？？いろいろ分からぬことばかりだ・・・そ
んな事を考へてる間にも無限の盾も崩壊しあ始めた

「そろそろ壊れるか・・・」

「そう心でも思つたときには・・・」

「あの遅れですみません！！」

「そう俺が読んだ人物とは葵だった

「神術式第28番機・・・月旅行^{ムーントリップ}・・・」

葵のその言葉と同時に満月の光が秘密基地や俺らを照らした

「月の世界へ・・・」

その言葉と同時に奏が倒れた

「大丈夫か？奏」

「大丈夫ですよ気を失わせただけですから」

葵は優しい笑顔で言った

「魔法陣種第5番機 時空の歪み・・・」

この術は結花と戦つたときに使ったものだ

「時空の女神よ 僕らを俺の家へ・・・」

俺と葵そして奏を魔法陣が包みしばらくすると俺の部屋に

「ハナセココハドコダ」

奏が起きたのでやばい行動をされないように柱に鎖で縛りつけと
いた

奏（

目が覚めると誰かの部屋にいた・・・1人の男が視界に入るブシ
ュケー様の邪魔をする男だ

「ハナセ」「ハド」「ヤダ」

そういうえばなんでプシュケー様の命令に従つてているのだろう・・・まるで束縛人形だな・・・この男はどこかなつかしい感じがする・・・一緒にいると落ち着く・・・それでも私は縛られているあの人のせいだ・・・まるで鎖で縛られ何もかも決められ命令どおりに生きていくのだろうか・・・そんなのヤダでも逆らう勇気がない逆らつたら昔みたいに・・・昔?昔何があつたつけ・・・そういうれば昔の記憶がない・・・

そんなことを考えながらも私は暴れていた・・・もう何もかもわからぬ

気づくと私は柱に鎖で縛られ動けなかつた

ついせつきまで戦つていたはずの男は私にむけて優しく微笑んでいる・・・なんなんだこの男は・・・誰なんだ・・・思い出せない・・・思い出したい・・・こんな事ホントはヤダ・・・向けだしたい・・・こんな暗い差別ばかりの世界を・・・そうだプシュケーはそう私に言つたんだ・・・結局ただ道具としてしか使われてない・・・どうせだったら・・・もう・・・もう・・・

「奏・・・俺を覚えてるか?」

いきなり男が話しかけてきた

「知るか・・・」

何か私の言葉には感情という何かを生み出すことができた気がした

「そうか・・・俺は零・・・柳澤零だ・・・」

「零・・・なんかなつかしい・・・」

どこか聞いたことがある・・・私にとつて何か大切な・・・大切な人どうしてかはわからない・・・でもとにかく大切な大事・・・な人・・・

第十二話 復活

どこか聞いたことがある……私にとつて何か大切な……大切な人どうしてかはわからない……でもとにかく大切……大事……な人……

「チツそろそろ記憶が戻るか……」

どこからか聞こえる小さな声……聞き覚えがあるが分からぬ思い出したくないそんな気がした

ドッカ——ーン

外から大きな音がした零という少年が窓から音のするほうを見る
と舌打ちをした

「こんなときに来るんじゃねえよ」

誰がきたのだろう……分からないがけっこうやつかいな人なの
だろう

「奏……一緒に戦ってくれるか?」

ぼそりと零が言った……戦うってさつきまで敵のように……
でもなんか敵つて感じじゃなかつた……信じていいのかな……

「裏切らない?……信じていい?……」

私は零なら何か信じてもいいと思つた裏切らないって思つた……

「俺はお前を信じる・・・決めるのはお前だ・・・」

私の目からは自然と涙が・・・涙が流れながらも私はコクシソとうなずいた

「信じる・・・まだ何も思い出せないけど・・・でも・・・」

私は泣きすぎてこれ以上何も言えなかつた零はそんな私を見ながら鎖をほどいて私を解放してくれた

「お前はお前らじいればいいんだよ・・・俺がお前を助けるから・・・」

零は私を抱きしづつ言つてくれた

「行こ・・・」

そういうと私の手をつかみ外へ出た

「出てこいや・・・いるんだろ結花！――」

結花・・・結花・・・何かとても嫌な思い出が混ざつて思い出やうと思つたが思い出せなかつた

「あれえもうばれた?まあいつか

暗闇から1人の少女が現れた

「魔法陣種第32番機・・・破壊の渦」

結花をかこむように魔法陣が作られていく

「フフ・・・フハハハハハハこんなレベルの低い技でブラックバードに勝てると思つてゐる」

不気味な笑い声・・・嫌!思い出したくない・・・そんな事を思
いながらも昔の出来事や結花の裏切り行為が頭のなかにインプット
されていく

「結花・・・なんで・・・なんで・・・キヤアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアア」

そのまま私は意識を失つた

零(

「結花・・・なんで・・・なんで・・・キヤアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアア」

奏はそのまま意識がなくなり・・・天界術の暴走が起こったアポ
ロンが奏のなかに入ろうとしたときに起こったアクシデントだ

「奏!—魔法陣種第76番機・・・宝物の探し旅・・・俺の大切な
ものは・・・」

奏!お前だ・・・

「フフなんかいい調子魔術式第29番機・・・悪ノ目」

結花の悪ノ目とは前に聞いたことがある・・・人の思い出したくない辛い過去を思い出させる技だ

「結花・・・やめろ！・・・」

結花は奏のほうを見て不気味な笑顔を作っている

「フハハハハハハハハハハいい景色」

俺は結花の視覚に入り自分が技の対象になつた

「チツ邪魔だ」

ぼそりと言われたがそんなのは無視した思い出す辛い過去・・・信じてた人に裏切られた辛い記憶・・・でも奏に比べればそう思った

「魔法陣種第22番機・・・口口口の針」

俺が今いやなのは奏を失うこと・・・奏を助けるには・・・

「針よ・・・結花・・・静川結花を倒してください」

針は結花のほうにむかっていく結花は針の速さに追いつかず体にささる

「フハハハお前は人を殺した・・・人を・・・それはお前にとつて忘れられないことだ！！」

結花はそんなことを言ったが実際は幻覚だ人を殺してなどいない

幻覚の中で殺したのだから……だが現実では結花は氣を失つただけである

「奏ー！」

奏のほうを見ると奏の目からは涙が……そう宝物の探し旅は大切な人を助けたいという願いが2分の1の可能性でおこるものである

「れ……零??.」「ゴメンね……ずっと忘れてて……」

「奏・・・」

俺は奏を抱っこし家のなかへ入つていった

奏

目が覚めると零に抱っこされていた

「奏・・・ありがとう」

零は私が起きたのに気づいてないみたいだった

本当は私が感謝するべきなのが逆に感謝されたのでちょっと不思議だった

第十四話 葵が！？

「奏・・・ありがと！」

零は私が起きたのに気づいてないみたいだった

本当は私が感謝するべきなのだが逆に感謝されたのどちらかと不思議だった

再び私は眠り起きると零の部屋の零のベットにいた

「あれえ？ なんでここにいるんだ？」

私はベットから降りようとしたら何かにあたった・・・電気をつけてみると零だった・・・

なんで一緒に寝てるんだろう？ まあいや私は再びベッドに戻り寝た

次の日

私が起きると零はベットにいなかつた零の部屋は一階で一階からは良い匂いがした

「ふああああ

私はあぐいをしながら一階へ行った零はキッチンで料理を作っていた

「おはよー・・・昨日はありがとうございました」

私は昨日の記憶がないでも零に助けられたところのは分かる

「ああおはよー」

零はフライパンで目玉焼きを作りながらいった

私は居間の椅子に座り零の家がこんな感じなんだと思しながら壁紙を見たりしていた

昨日どんなことがあったのだろう・・・そんな疑問がある・・・でもそんな大切な事でもない

「できたや～」

零はちゅ～と跳ねうつな声で言った

「はーい

私はダイニングルームに移動し零の手料理に睡然した。「飯・目玉焼き・サラダと水・・・」じんだけバランスのよい食事をしているのだろう

「いただきま～す」

零と私は声を合わせ言い食べ始めた・・・零つてこんなに料理うまかったんだ・・・そんなことを思った

「うわそつせまでした」

私は皿を片付けお礼としてお皿洗いをした

「零つて1人暮らしなの？？」

「ああ・・・お母さんは女神だから天界にいるし、お父さんは病気で死んだ」

「なんかゴメン・・・」

そつか零は人間と天界の住人の間から生まれたんだもんね・・・

「いや謝んなくても・・・」

「えつあつゴメン」

つい謝ってしまった

「だから謝んなくてもいいから・・・」

零

ピンポーン

家のチャイムが鳴った

「？誰だ？？」

俺は不思議そうな顔をしながら出た

「あのえりと葵ですが奏さん元気ですか？」

葵か・・・

「ああ葵か・・・奏なら元気だよ」

俺はそういう言いながら奏を連れてきた

「よかつた・・・」

葵はなんか変な反応をしている・・・

「大丈夫か？顔を赤くして？」

俺は葵のおでこに手をあて熱がないのを確認した

「熱はないな」

ただそう言つただけなのだが葵は顔を真つ赤にして「ひらを見られ奏はムスッとした表情を見せた

「俺なんかしたか？」

「した」

奏と葵は声を合わせ言い、奏の声は怒った感じで葵の声はあわあわしている声だった・・・

しばらく静かになり葵が口を開いた

「零さん・・・あの明日・・・学校で言いたいことがあるので・・・」

「

葵はそう言い残し帰つて行つた

「奏? なんでそんなにムスッとしてるんだ?」

俺が聞くと・・・

「恋愛事情! ! !」

「どういつ意味だ? わっぽり分からなかつた・・・別に葵のことではないとも思つてないぞ?」

次の日

キンコーンカンコーン

奏と葵の言葉を不思議に思いながらも授業をうなづいていた

朝、学校に登校してから下駄箱に入つていた葵からの手紙「放課後、学校裏の迷いの森の入り口に来てください」と書いてあつたのを確認した

放課後

俺は迷いの森の入り口に行くと葵がいた

「待つたか？」

「え・・・、うん全然・・・」

葵はちよつと慌て氣味だった

「あのえつとちよつと散歩しない?」

葵はそう言って俺の手をつかんだが、なぜか顔を赤くし手をはなした

奏へ

私は葵がきつと零になにかするだらつと疑い零や葵に気づかれないようここにそりついてきた

「迷いの森の入り口?」

葵のあとをつけしていくとついた場所だ

零がきた・・・なんか話してる・・・あつ手をつないだ!ーーあつはなした・・・

葵へ

じうじょう・・・2人つきりにしたけど・・・もつと緊張してきてた・・・よし!ーー

「零ちゃん……あの……私、零ちゃんの事が好きです……」

あわわわわあ 嘩つひやひたよお・・・

「うひと何やつひんのよー。」

私はびっくりして声のするまつを向こうた秦さんだ

「零は・・・零は私の・・・私の・・・」

奏さんも慌ててるみたいだ

「2人ともびうしたんだ?」

零さんは何が何だかさっぱりわからず質問してきた

「零・・・私と葵・・・ドッヂチをとる・・・?」

奏さんが真剣な顔で私のほつを見る・・・

「わ・・・私も聞きたいです・・・」

「お・・・俺は・・・」

零

「お・・・俺は・・・」

奏と言おつとしたが強い魔力を感じたので言えなかつた

「敵だーー。」

「じゃあ戦い終わったら・・・答えてね・・・」

奏と葵はそういう女神に変わった

「フフフフフフフフ今田は楽しい遊びになつそり

上を向くと黒羽がいた

第十五話 新しい仲間は？？

「フフフフフフフフ今日は楽しい遊びになりそり」

上を向くと黒羽がいた

奏へ

なんでこんなときに敵がくるの――――そんな事を考えながらも私はアポロンにかわった

アルテミスへ

葵と奏殿女神の意識になり、戦いがはじまった

あと私の名前はアルテミス・・・言い忘れていた・・・

「フフフフ今回は森全体を魔術で囲んだお前達の力は弱まつた

黒羽の言葉にブチッとなりつい術が

「神術式第23番機・・・希望の鈴」

私とアポロン殿そして零殿の周りを神術の陣が囲む

これなら少しは魔術の影響をつけない

「チツ小細工しやがつて死にな」

私の周りにはトゲが多いツルが囮み逃げ場がない

葵

零殿がツルを切り私のことを助けてくれた

「さすが葵の彼氏だ・・・だが私はアルテミスだ」

「わりいー・・・あと彼氏じゃない」

こんなときでも鈍感だな・・・

アポロン

ゼスも鈍感すぎにもほどがあるぞ――

天界術式第85番機 神の天罰

わらわの装備には矢と弓が増え黒羽にむけてうつてゐるのだが、よ
けられる

「逃げるな直接戦え！！」

不気味な笑い声と共に黒羽がおりてきた

まあから気になっていたのだがその趣味の悪い高そうなネックレスはなんだ？？

わらわは弓矢で黒羽をねらい射る・・・

黒羽は左手をわらわのほうへ向け

魔術法第77番 死の道しるべ・死にな」

そういうとネットレスが黒い光をだす。

力が・・・力がみなぎるぞ・・・フフツフアツハハハハハハ

た――

「ぐ・・・な・・・何を・・・」

そういうと黒羽は倒れネックレスはなぜか消えた

「なんなんだ・・・あのネックレスは」

それからゼスと葵を呼び、そのことを話した

奏

黒羽は零の家ことあめりとひなみつた。ひみつと心配・・・

「ああ結局あれからなんも言ひてないじゃんーー。」

さつきの続きをひなみつたのだろうか?零は私のことを選んでくれるのだろうか

それからすぐ私は寝た

次の日

「はじめましてー黒羽佳奈くろねかなです」

なつ、黒羽って言ひうか性格だいぶちがう

「なんかちがう人みたい」

私は零にこいつそり言つた

「やつぱぱつ泰のときみたいに記憶がない」

私にそり返した

「あのあんまり覚えてませんがよろしくお願ひします」

「ひとつひとつじだ・・・もつ無関係になつたのでは??

「もつ無関係じゃないの?」

「あつ言こと忘れです。えつと女神入りです！」

「こや、俺の家このとときに入つたみたい」

「あつあつえな———」

私と葵さんは声をあわせこいつた

「零・・・・くひせ・・・じやなくて佳奈さんになんかしたでしょー。
——」

「えつ？なんにもしてないが！」

零は鈍感だからどういふことかわからぬりわかっていない

「あととかくよひこくべーーーー。」

やうこいつと佳奈さんは零の手をつかんだ

第十六話 三角関係～四角関係？？

「まあとにかくよひし〜〜〜！」

やついつと佳奈さんは零の手をつかんだ

絶対なんかしたでしょ！…じゃないと女神は入らないもん！…・

「零・・・やつきの続きー・ビッヂをとるのー・

私は葵を見た後に零を見ながらいった

「俺は・・・」

「あの？なんの話ですか？？？？」

佳奈さんだ、このまま話すともうとやつかいな事になる・・・

「えつとだな・・・俺が秦と葵ドッグをとるかって話で〜

言つちやつたよおー

「私も仲間に入れてください！…！」

ガアアアア・・・恋敵ライバルが増えたああー！

「別にいいんじゃない？」

零が言った

「無理、無理、無理、無理」

私と葵さんは声を合わせ言った

でも、零の気持ちは変わるかもしれない

「じゃあ自分なりに努力してクリスマスの日に言つてもいいんじやない！……」

佳奈さんが言った。たしかにそれもそうだ

「さ・・・賛成です」

「私も賛成」

私と葵さんも賛成し、その日まで待つことになった

「昔々あるところに三人の少女と一人の少年がありました。一人は悪へ手をのばし、もう一人は善へ、もう一人は少年と幸せに暮らしだった・・・」

どこからか聞こえてくる不思議な物語、まるで・・・本当にあるかのような・・・

葵

次の日

「あああああどんな努力すればいいのかなあ・・・ううわからんないよお・・・そうだ！――！」

私はバックに入ってるケータイを取り出した

「あの零君ですか？もし良かつたら今度、ゆうえんちにいきませんか？」

「ああ抜け駆け？」

ケータイからは女の声・・・ケータイ番号もあってる

「あ・・・あのどちらがおじょうか？？」

「佳奈だよおーーおはよう」

佳奈さん・・・男の人のケータイを見るのは・・・

「ていうか、なんで佳奈さんが零君のケータイに出てるのですか！」

「そういう葵ちゃんも、なんで零さんじゃなくて零君なのぉ？？」

「う・・・それは努力です・・・ずっと零君を連発し言ふるよつにしたんです！！」

「努力をしたんです！」

私はいばるように言った

「そうですか！私は零兄ちゃんと無理くり言つてもこよつて父兄に交渉しましたが？」

「うう・・・」

でも・・・呼び捨ての奏わんのほうが上じやないか？？

佳奈

「零兄ちやん！」「フフン！葵ちゃんを追つ払いました！！」

私は零兄ちやんに血腫したが、なぐられた

「零兄ちやんはやめろ！あと勝手に人のケータイ見んな！！」

「零兄様のほうがよかつた？？」

「やめろ・・・零とかそういうのじりーー誤解をまねく言い方はやめる」

「うーん。おれるでし・・・あつ！」

「じゃあ・・・ダーリン！..」

私は零じやなくてダーリンに抱きつきながら言つた

「お前は彼女よりも妹のほうに近くな・・・」

ムツ・・・ダメだつたか

「子供じやないもん！..料理だつて」

「料理だつたら美味しいのにな・・・」

予想以上にヒドイ言い方だ・・・

「子供じやないよお！..！」

「はいはい」

オイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイオイひどくない
か・・・

夜・・・ベットにて

「ハハビハしければ奏ちゃんをぬかして零君の彼女になれるか・・・」

「一ん・・・なんなんだハ・・・」の胸が苦しいつていうか痛
いつて感じは・・・

奏～

零は私の・・・絶対だれにも渡さない！..・..だからアタック・
・..アタック！！

第十七話 とつあい作戦！！！

奏（

零は私の・・・絶対だれにも渡さない！・・・だからアタック・
・・アタック！！

次の日

ピンポーン 零の家にて

いないかな・・・

ガチャ・・・あついたいた

「零・・・2人で学校にいかない？？」

零は半分こもった顔で私を見る

「どうしたの？？」

「いや、佳奈がな・・・」

「佳奈さんがあっ？」

わしそく邪魔されるのーー

「佳奈も一緒にいいか？？」

「あ・・・うん！」

しょうがない・・・変に嫌つて言つてもダメだろ「うし・・・

ピンポーン

「あの一緒に学校にいきませんか？？」

ガーン葵さんまで・・・結局4人で学校へ・・・

キンゴーンカンゴーン

授業中なら邪魔されない・・・よね

「れ・・・零あのさ教科書、忘れたから隣で一緒に見ていい？？？」

「ああうん・・・」

零・・・顔アカツ！熱あるのぉ・・・ていつか近くだとシンセン
だなあ

「あのセツの誕生日って明日だよな？」

零がいきなり聞いてきてびっくりした・・・つて明日が自分の誕生日つて忘れてた・・・

「うんーうだよーーー！」

「そつか・・・」

零の顔は耳まで真っ赤・・・キャー――カツ「トイイ――!――!

葵

キン「――ンカン」

「零君?――一緒にお弁・・・か・・・秦さん・・・つて佳奈さんも

――!――

むううわきに手をついたか・・・

「あのお私も一緒に・・・」

「ヤダ!――!――

佳奈さん・・・ヒドい・・・

「いいじゃねえか、みんなで食べようぜ――!――

さすがです。零君!――!――!

「あ・・・ありがとおー!」やれこせや

私はペコっとお辞儀をして零君の隣に・・・

「零君の隣は私!――!――

佳奈さんはギュウッと零君へつづく・・・が零君にたたかれた

奏さんは「」は私の場所だ！って雰囲気をだしている・・・無理だ・・・

しかたなく私は零君から向かえの席にすわった

「あの零君・・・私・・・お弁当を作ってきたので食べてください！」

「え？ ああ・・・」

私は零君から許可をいただいたので、バックからお弁当を出し渡した

「つまつまえ――――――！」

私は零君のその言葉を聞き、後ろを向いてガツツポーズした

零

「うおうめえ――――――！」

「うじいな皆・・・つていうか弁当すげく豪華なんだけど食べるの
がもつたいない・・・

家にて

奏は優しくて、それでいて頭が良くて、明るくて・・・俺に未来をくれた・・・

葵は優しくて、人見知りでおだやかで・・・がんばりや・・・

佳奈は明るくて、うるさくて、妹っぽくて・・・バカ・・・

俺はベットに入つた・・・

俺は今、奏が好きだがもしかしたら葵・・・佳奈・・・のどちらかを好きになるかもしない・・・でも、全然しらない誰かかもしない・・・でも俺は俺の未来をつくる！！！

第十八話 奏への告白

俺は今、奏が好きだがもしかしたら葵・・・佳奈・・・のどちらが好きになるかもしない・・・でも、全然しらない誰かかもしれない・・・でも俺は俺の未来をつくる！――

？？？

「か・・・奏さん！――好きです！付き合ってください」

奏さんは戸惑った顔をして、一いちらチラチラ見る

「えっと・・・好きな人がいるので・・・

やつぱり零のほうがいいのか・・・

「じゃあ友達から・・・いいですか？？？」

「えつまあ友達からなら・・・

戸惑った顔を変えないまま奏さんは言つた

「あの映画のチケットが福引きで当たったのですが・・・一緒にい
いですか？」

「うん・・・まあ予定がなければ・・・

「じゃあ――明日・・・いいですか？？」

「えつ！明日・・・うーんたぶん大丈夫！！」

「じゃあ明日、学校の南口で…」

「うそー。」

わいつらとい、秦ちゃんは笑顔で手をふって「かへ走つてこつた
奏へ

授業時間にて

ハア まさか学校体験つて「いか散歩？」して「いるとき」告白されれる
とは・・・つてこつか告白つて・・・

「どうしたんだ？？わいつからブツブツなんか言つて」

隣の席の零が心配そうに聞いてくる。零は私がブラックバードに
洗脳？されていらい、小さのことでも心配されてくれるよつになつ
た。

「ああ、なんでもない！ちよつと明日をそわれただけだから」

「誰に・・・？？」

ああ言つか・・・もっ言おひ別に隠すよつな」とでもない

「えつともお告白へられて・・・あつでも断つたよ・・・うん私は・・・ねつで、友達からつて事になつたから明日、映画を見に行く」とになつた

ふうう、なんかいろいろとすりつけられた……

零～

「えつとそのお告白？されて……あつでも断つたよ……うん私は……ねつで、友達からつて事になつたから明日、映画を見に行くことになつた」

おーおーおーおーおーおー、なんだそりゃあー

「じゃあ俺もつこしていく！」

まあ別にいいけど……ちつきから周りの人の視線が……

「れ・・・零、授業中だからあとで話そつ……」

私は焦るよ^ううに言つと、零はまわりからの視線に気付いてくれた

「おーおーおー！」

はあよかつた……そこまで鈍感じやなかつた

奏～

うーん、でも零だけ連れてくとヤバい事になる気が……よし……

私はバックからケータイを取り出し電話した

「あつもしもし……あの明日、映画……予定あんの？？うん、

そつか

断られたが、まだ一人残つてゐる！－！

「もしもし・・・うるさい！－・・・あつゝゴメン・・・明日、映画
行く？？あつうんじやあ南口で！－！」

次の日

私は南口に早めについた

「あれえ、誰もいないや・・・」

4分後・・・あつ・・・零だ！－！

「おはよー！－早いね！－！」

「奏のほうがだいぶ早いつづーの！－！」

「だつてえー零に早く会いたかつたんだもん！－！」

私はウインクをして、言った

零は顔が赤くなつたのを下を向いて隠した

次に告白男子の跡加辺晋吾君あとがべしんご君が二番田に来て

「もう一人、呼んでるから！－！」

予定集合時間から10分後・・・あつきたきた

「ゴメーーン！用意があちよつといひいろあつてえーー！」

そう私が呼んだのは佳奈さんで・・・ってふつうわかるか・・・

ପ୍ରକାଶକ

私は挨拶をしたのだが、無視されしかも、零に抱きついでいる！！！

第十九話 恋愛映画！！

「ウツタメ」

私は挨拶をしたのだが、無視されしかも、零に抱きついている！－

やめろ――――・・・そう叫びたかったが我慢した

もちろん嫌われないためだ！

「…じやあ行け」…」

ああたしか丘映画館たよな??

え
・
・
・
そうだ?
け?
晋吾君、
何處?
?

「え、これは映画館ですか？」

なんか負けた気分！まあいいかでまた佳奈さんを抱きしめている

行二

晋吾君は私の手をとり引き出した・・・って手つかまないで

「うんうん」・・・

しかたない・・・我慢我慢！！

零

「えつとF映画館であつてます」

おつあたつた!!

・・・おい！佳奈！話せ！-！やつぱり子供だ！-！」

「行こう・・・」

あつライバル ≪しんご≫

「あら・・・う、うん」

ガアア奏！待てよ！！つて

「佳奈！－！離せ！－！－！」

ええー零と一人つきりじやん！！！ねつ！！」

おいおいおいおいおいおいおいおいおい

離せええええええええええええええ——」

奏

離せえええええええええええええ——」

・・・零ゴメンなさい

「奏さんって零さんの事、好きなんですか？？」

「えつ・・・あつ」

卷之三

「あつ・・・すみません、今の忘れてくださいーーー！」

「えつ・・・あつうん」

10分後

「わりいーー、こいつ『かな』が離れなくて・・・」

私と晋吾君は5分前には、もう映画館についていた

零と一人きりになれるってたのに!!」

たしの一人でぎりたつたたそ！！

あ、そろそろ始まるみたいで、よ チタ、ト置いは行きまし、

L

ああ、零が心配だよおおおおおお——

「あつうん」

もう佳奈さん呼ばなければよかつたああ――

「奏—買つてきてくれー」いつを追つ払つかひつ。」

「ムツ私から逃げようとして！」

ああ零・・・やつぱり良い人だなあ・・・つて感心してゐるひまで
もない人が多すぎ!!

ドッカーン

おーおいこんなときに敵つてあれ??ドア開けた音だつた

ああ葵さんも来ちゃつたか――

「おひおこロイシラモ一緒に見るのか??.」

零が半分きれた状態で言う・・・

「えつあつうん・・・なんか『メン』」

一八

零は大きいため鳥をいく：・・・マジで二メンなぞ

レーベル：「JBL」の横に「JBL」のロゴマークがある。

このまま、零かどられるのはイヤだよ……

チケット売り場にて

「えっと、この映画で三人をコツチ側で一人反対のコツチね！！」

おおナイスな事を思いついたね！！私と零とで一グループつて事ね！！

「じゃあどうに分かれるんだよね！」

「ああ三人グループは佳奈と葵と…」

えつあつえええええ私と零で一人つきり…死んじやう…ある意味…！」

「ええーズルいです…なんですか…！」

「そりだよお一人つきりになつて将来の…グハツなんで叩くのだーー」

「…」

葵さんと佳奈さんは反論を聞かず…ちょっとドジンマイ…！

「つていうかチケット全部俺の金で買ったんだが…！」

零が言つ…なるほど…だからわざわざ自分のお金を使つて…つてなるほどじやないよお

「てわけで行くぞ奏…！」

零は私の手をとり、どんどん奥へ歩いていく

「でも…いの？」

私は半分心配と半分喜びの声で言った

「いいんだよーもしさイツ《 shinjū 》が敵だつたら……」

えつもしかして心配してくれたのー。

「えつとその……あつがどう……心配してくれて……」

零の手があつたかい……耳まで真っ赤な顔を見せないようじぶん前に進んでいく

「奏……俺……いや、なんでもない」

なこを言おうとしたのか分からぬ……

「つこたぞつ……」

「えつあつうんー。」

ビックリしたあー

今回みる映画は恋愛ものらしい

零

映画が始まった

2時間後

「フウ終わった！・・・さあいくか」

俺は横を見ると俺の手をギュッと握つて寝ている奏・・・

- おや -

……零ありがとう……スピイー

一
か
な
・
・
・
・
」

俺は奏のホッペにギアをしてから奏を起こした

卷之三

፩፻፲፭

奏は力きなあぐひをしなから席を立つた

奏

一零？？フワアアア――

私は大きなあくびをしながら席を立った

零????なんでそんなにうれしそうなの????

「んっ？お眠り中の姫様に告白されたからだよっ！…！」

私は言葉の意味がわからなかつた

「誰？？誰に呪われたの？？」

私は呪由といつ言葉に気が付き問い合わせ詰めた

「秘密……」

零は満面の笑顔で言つた

「うー教えてよー」

「そのうち教えてやるよー！」

やつこいつと零は私の頭に手をおさへた

「零くーん、映画おもしろかつたねえー！」

葵ちゃんが零のところに突っ込んで言つた

「ああエントeingのキスシーンなんか特になーーー！」

「キスシーン？？そんなのなかつたです」

「あつああだつて現実のことだからー。」

私達、零以外はみんな、はてなマークを頭の上に浮かべていた

第十一話 番号が・・・！？

「あつああだつて現実の」とだから…。」

私達、零以外はみんな、はてなマークを頭の上に浮かべていた

帰り道

「零ーー！誰に罰せられたの？？？」

私は真剣な顔で質問する

「ああ・・・」

うつこいつと零は口を耳に近づけ

「奏だよーー！」

ぼそりと言つた

「わーーー私、告白してなーーー！」

「寝言で言つてた

あわわわああああーーー顔が真っ赤になつていいく

「じゃあキスした人つて・・・」

「そりや決まってんだろう奏だよー！」

「えつえつ寝てる時」？？

「ああそりゃあつて誰にも言つなよ
「みんなの言ひははずなこじやん！？」

「そ・・・そんなの言ひははずなこじやん！？」

「言つたら私ある意味、死んじゃうよー

「あつじや・・・じやあね

零は手を振りながら家中に入つていった

私は顔を真つ赤にしながら手を振り言つた

家 奏の部屋

バクバクッ・・・

心臓の音がヤバい・・・知らなこづちに告白してたなんてえ――

私はベットでヨコになりながら「ロロロロ」転がっていた

ていうか晋吾君に謝つたほうがいいよね・・・私と行く予定だつたのに・・・

私はバックからケータイを出して電話をした

「もしもし？天川ですが？？あつ晋吾君？？今日は「ゴメン」いろんな人よんじゅつて・・・

「いいよ・・・別に世界がちがうんだから」

「えつ世界？？」

「ボク、見ちゃつたんだ・・・奏さんは化け物の話の事を聞きましたを倒そうとしているみたい」

「えつ・・・」

私はびっくりした正体がバレたのだから・・・

「散歩してたら公園のベンチで泰わんと零わんが戦つてると見
たんだよ・・・」

「そ・・・そんな・・・」

私は驚きを隠せなかつた

「だから、奏さんは正義なんじゃないかつて・・・だからボクもブラックバードと契約したんだよ」

「嘘でしょ嘘だよね」

「だから、それを報告するために映画に誘つたけどダメだった・・・」

L

晋吾君の声はだんだん笑いまじりな声に

「しかも君は零のほうの仲間だつて事も知つた……」

「わ・・・私はそのときの事を覚えてない・・・」

「そう！だから君もボクらの仲間にしようと今、零の部屋にいてね」

「れ・・・零の部屋？？」

「零を殺さないで・・・零は零は私を救ってくれた、私の大切な人なの！！」

二
一

電話が切れた

私は、急いで階段を降りて零の家へむかつた

「ハアハア零・・・」

零の家につくとアポロンが言った

「スゴい魔術じや、気をつける」

「う・・・ハア・・・うん」

私は零の家に入り階段を昇つた

「クククククククク無様に死んでいけ！」

大きな声とともに私は零の部屋に入った

「や・・・やめて！－！」

第一十一話 零と奏の戦い＆零と奏の休み??

「ククククククククク無様に死んでいけ！！」

大きな声とともに私は零の部屋に入った

「や・・・やめて！・・・！」

部屋はうす暗く零達をカーテンの隙間から月の光が照らしていた

「か・・・奏・・・に・・・逃げる！」

「『零』やめて！やめてよ！..」

私は晋吾君の手を零から振り払った

「なんでやめなきゃいけないの？？ボクただ君を仲間にしたいだけなんだよ？？」

「じゃ・・・じゃあ私！仲間になるから！..もつ零を・・・零を傷つけないで！..」

とつそに言いつてしまつた・・・でも答えはこれしかないだらつ

「ば・・・バカ、奏・・・逃げろ」

耳を澄まさないと聞こえないと零の声が聞こえる

「でも・・・いひないと零が死んじゃう・・・私のせいであを傷

つけたくない……」「

私はいつの間にか泣いていた

「クククじやあこいつ秦さん！ボクと一緒に……」

「奏……行くな……」

零が必死に言つが私は泣きながら首を横に振る

「零のこと好きだったよ……これからも……でももうお別れかも」

涙が止まらない……止めれない……

零（

「零のこと好きだったよ……これからも……でももうお別れかも」

「奏……」

俺は、力を振り絞り奏にゆっくり近づく

「零……」

奏が「ツチに来る

「奏、絶対助ける。どこに行つても絶対に」

奏（

「奏、絶対助ける。どこに行つても絶対に」

零・・・でも最後の切り札はある！！」

「零・・・佳奈さんは？？」

零はビックリした顔で言つ

「え？？そりいえば出かけてて・・・」

「じゃあそろそろ帰つてくるね？晋吾君ーー！」

「そうだ！女神がいれば、絶対に！！」

ガチャ

「ただいまー」

來た佳奈ちゃん

「クッ！！女神が2人・・・神が1人・・・まあいいブシュケー様にかなりのお力をもらつたボクに勝てる者はもういない！！」

「そうだ。それが一番の問題！」

「アポロン・・・倒せる？？」

私はボソリと自分（アポロン）に話しかけた

アポロンへ

「大丈夫じゃ……秦殿

「アポロン……來たか……」

ゼス殿は壁によつかかり、ゆつくり立つた

「どうしたのー?? やけに静かつてうわああああ何この戦いシーン
! ! !」

おお佳奈殿もきたのか

「えつと女神にかわつてもらえないか??」

わらわはまだ佳奈殿の女神がどんな方が知らない

「あつうん……いいよ」

「私の名はテミスー! 佳奈はいつも撃を守らざスマン

「まあまあじゃーとにかくあいつを倒すのじゃ

「分かつたが……零が退けてくれなければ私の術は……」

「ゼス殿、邪魔らしいぞ?」

「あつああわかった」

めいつと歩を出す、JRの調子だと何時間かかるか

「わざわざの肩をかすがでー。」

「ああセンキュー」

零は肩に手をおき歩を出した

「じゃあ私はやつてくるからなー。」

トミスはそこいつが手伝えって言いたい

「ああいこでーーー。」

零は言った。ここいつもよく女だらけでやつてけるなあ

「捷術式第27番機・・・正義柱の刑」

正義と大きく書いた柱がどこからか出てきた

「佳奈の者をよく・・・殺そつとしたなあああああああ

恨みがスゴい人じや・・・

柱は晋吾殿に落ち結構痛そつじや

「フハハハハこんなもんで私は滅びるかーー！」

晋吾殿の声がどこからかする

「天界術式第75番機・・・善と惡の區別」

わらわは悪を滅ぼす術を使つ

なんじゃ「イツ！－」だが、奏の為じや－－

「グツグハハハハハ・・・お前は人間を殺したその罪は消えないぞ
フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

晋吾殿の姿は粉になり光になり最後には消えた

奏

「大丈夫？？零？？大丈夫？？？」

私は、零のそばで泣き零は私を抱く。ドキドキするけど今は零の体のほうが心配だ

「大丈夫だ！――こうみえても神の血もひいてる……」

全然大丈夫に見えない！！

「今日は私が一緒にいてあげる！」

私は看病の為にそういった

「あああつがとい」

夜だったから今日は零の家に泊まることになった

布団にて

零の家には零のベットしかなく、佳奈さんはいつもソファーベッドで寝ているらしい、だから私は布団で寝ることになった

でも、零の部屋…！

「零…？…起きてる…？」

「ああ起きてるナビ…？」

「眠れなくて…・・・」

「じやあ起きてもらひつか…？」

「えい…」

「…」

なんだかうへへくわからなこまま田をつぶった

「俺、お前のことだが、もひとつ…もひとつ好きになつた…・・・」

「えつ…・・・」

「しゃべんなーー。」

「だから、今からやるのは本気だからなーー。」

零はその後、私の唇にキスをした

「れ・・・零」

私の心臓の音はすいへじめや二音でなる。。。

「じゅ・・・じゅあおやすみ」

零はそのままベットに入り込んだ

零・・・いきなりキスつて・・・逆に寝れないよおお

次の日

私は枕の近くにおいてあつた服に着替える。。。

「あれ??.」

一番右には一つの紙が置いてあつた

「え??.と、零から??.かな??.」

その紙には次のよつてあつた。工市の海岸公園で待つ

私はその紙を読んですぐ着替えた

海岸公園にて

「今日は海で遊べるし、有名なテニースポットだ

私は海のまくへ歩いてた

「見つけたーー。」

えつ誰？？零？零の声だ

「零ーー。」

私は後ろに振り返る

「今日は秦を独り占めしたくて・・・」

「さあ、ひさしひ、」とあるみたい・・・

「えつ・・・」

零は私を海のまくへ連れてった

「俺、海、無理だか？」

「えつーーーじやあ見てよっか」

「あ

零は砂浜に座り海を見る

「奏・・・俺、眠くなつた

零は口ッチを向く

「えつ寝ひやうの??」

「眠氣覚まし・・・」

零は口ッチをむいた

「えつ??..」

私はよくわからなかつた

零はいきなり口ッチに倒れてくる

「んつ」

零が倒れたところは私の口と零の口がぶつかりなるといつだ
つた

おきれないよおおおおおおおおおおおお

心臓のドキドキはもしかしたら私の胸を通じて零に届いてるかも
しれない

零は私の顔の横に手をおいている

わたしは手を広げた状態

零は寝ている・・・

私も一緒にねてしまった

夕方の海岸公園にて

私がおさると零はまだ寝ていた

私、こんな状態で寝ての？？

ちょうどビーチパラソルで背には見えなかつたらしいがこれはヤバい

「ん？？」

零がおきたようだ

零はおきあがり口と口をはなした

「わりいー寝てた、でも、もうちょいいいかな・・・」

「えつ・・・うん」

私と零は立ち上がり、夕日がきれいな海で、夕日の光に照らされながら私と零は大人なキスをした

帰り道

私達は顔を真っ赤にしながらも手をつなぎ歩いていた

家

「やつ、ビリこいつたんだよお

佳奈さんはこう言われたいへんだった

自分の家に帰りケータイを見ると、なぜか零とのキスシーンの写

真がとられていた

第一十一話 ひ・み・つだよー！

家

「 もへ、どこにいたんだよおお 」

佳奈ちゃんにはこういふ言われたいへんだった

自分の家に帰りケータイを見ると、なぜか零とのキスシーンの写真がとられていた

「 な・・・なんで・・・ 」

私はビックリして大きな声をあげた

「 わらわが撮つておいたぞ 」

ファッション確認の為に買った大きな鏡につつた私が言った

「 な・・・なんで撮るのーーしかも待ち受け画面に登録してあるしーー 」

「 なんじやーお母さんのことを思つてやつたことじゅうやーーー 」

零も「 れは知らなかつただろつ・・・寝てたし・・・ 」

「 まあ、いいやつーーでも今度からせやんと私に言つてからねーー 」

「 ーー 」

「お主は寝てた」

「ウニ」

私はなんか負けたような気がして腹が立つてた

次の日

私がからしたら久しぶりの学校って感じがする

昨日は「るんな」ことがたくさん起ったので、その由は向田もたつてゐるような気がした

登校中、零と佳奈さんが一緒に登校してるのが見えた

佳奈さんほんとでも元気で零ほんとでも疲れたつて顔をしていた

一
あかね

私は隣まで来た零と佳奈さん】挨拶をした

「ヒカルの世界」

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର

零は声も疲れた感じで佳奈さんは全然まだまだつてへらい元気だ
つた

「零、大丈夫？？」

私は零が心配で仕方がない・・・

「ああこいつ『佳奈』がいろいろズカズカとなつ」

まいにちあつたらしい

「～それと昨日の」とは誰にも内緒だからなーー。」

昨日・・・長時間のキスが頭にうかぶ

私は顔を真っ赤にしながらゴクリとうなずいた

佳奈さんが問い合わせてきた

「電話で話したんだ！？」

零は嘘の証言をした

「どんなん...どんなん!...」

をひに質問してくる佳奈さん

「子供に言えねえ秘密！！」

零は大きなため息を出しながら言った。

「子供じめなこいつおおおちさんとした高2ですが？？」

「見た目が子供だからダメ！！」

零は佳奈さんを子供あつかいし、ばれないよつて言ひ返す

私だつたら、もづばれていただりう・・・

学校にて

キンコーンカンコーン

久しぶり？に聞く鐘の音

「今日の血盟は算数のドリルだからやつとこでえー

加藤先生はそう言つと教室を出て行つた

「ねえ晋吾君さあ外国に転校したんだつて！－」

そんな噂がたつていた・・・晋吾君のこの噂はブラックバードが
流したのかもしれない

「外国ねえ・・・」

私はやつづぶやく

「なんだ奏、もしかして外国に行つた事ないとか？？」

零は嘘だろーって顔で言つた

行つた事ないけど悪いかああああああ

「ないけど・・・ダメ??」

「もうなんだああ」

朝の事が気になつて佳奈さんは零の席にコソッと来ていた

「お前《佳奈》なんで」「こんだみーーーー。」

零はちよつとキレたような顔で言った

「零い怖いいい——」

佳奈さんはからかうように言う

「殺すぞテメエ——」

零はついに我慢できなくなり大きい声で語った

「うおー！ メンバー怒らすつもりは……なかつたウケッ！」

佳奈さんにはなから謫N

「世にはり零にて不思なんじやなし? ?」

晋吾君の噂よりも零の噂のほうが大きくなる

「ウグツウウ」

佳奈さんはまだ泣いている

「奏……どうかしきみよ」

ほとんどのクラスメートが私にそいつ言つてへる

「な……零、許したら??.」こんなに泣いてるんだよ??.」

「奏が言つたらしかたねえー許すー」

零はキッパリ佳奈さんに言つと

「やつた———」

佳奈さんはいきなり元気になり、そのまま泣いていたとは思え
なかつた

第一二三話 真実？現実？

「やつた――――」

佳奈さんはいきなり元気になり、さつままで泣いていたとは思えなかつた。

パチツ！

田が覚める・・・私は寝ていたのだろうか？

じゃあ、零とキスしたこと夢？

ピンポン

私は一階から聞こえるチャイムのかすかな音を聞き逃さなかつた。

誰だろ？・私は時計をチラリと見る・・・

「九時？…あつ今日、学校だ！」

私は学校だとつ事が分かり、急いで一階にいきな闇のドアを開けた

「奏、おせえーよー何時間コロコロを押してたと・・・まあいい、わつわと行へぞー！」

外に立っていたのは、零・・・今、聞こつかなキスのこと・・・

「零・・・私たちって一人で一緒に海に行つた？」

「行つたけど？どうした？記憶喪失？」

零は心配そうな顔になる。

「だ・・・大丈夫！」

「まあ海に行つたとき寝ようとしたら、奏が鼻血だして倒れたのはビックリしたな！」

「えつ！？本当に？いつの間にかこんなに妄想好きに・・・

「そうだけ？」

「ああビックリしたから抱っこして口吻につれてきただろー！」

たしかにそんな感じだったかも・・・ホッとしたけど、なんか惜しい感じも・・・

「あつ学校の用意するから・・・さき行つていいよ！」

「行かねえーよー佳奈を先に行かせてまでも待つてたんだから・・・

」

零は顔を隠すように下を向く。私は、歯磨きや顔洗いの為に洗面所へ走つていった。

十分後・・・

「『メン、じゃあ行こ』つか！」

私は、すべての用意を終わらせ零の所へ行った。

「あーかなりの遅刻だぜー！」

零はケータイの画面を見て言つ。

学校

「ハアハア・・・」

相変わらず、この三階までの階段は辛い・・・

「大丈夫か？」

零は楽勝！みたいな顔をして言つ・・・意外と辛そうだ。

「だ・・・大丈夫！」

階段を走る・・・教室の前まで来た。

「ハアハア・・・」

まだ息は荒い・・・ゆっくりと息を整える・・・

「よしー！」

息が整い教室のドアを勢い良く開ける

「遅れてすみませんでした！」

私と零は同じタイミングで同じ言葉を言つ

「ねえ、零と奏つて付き合つてんの？」

最近はそんな噂も聞くようになったし、一緒に教室に入ってきた、この状況でもコンコンと言つている人もいる。

第一十四話 零、失恋の危機！？

最近はそんな噂も聞くようになったし、一緒に教室に入ってきた、この状況でも「ソソソソ」と言つてゐる人もいる。

「かなっちー、今日、日直だよおー」

「えつ？あつ！忘れてた！」

私は、窓側の一一番後ろの席に座り、授業の用意をする。

今日は朝から数学で、不運だ！と私は思った。

授業中、今日はだいぶ前に習つたところの復習で結構簡単だったので、ずっと校庭をボーッと見ていた。

キンコーンカンコーン

「かなっち？日直の仕事、やつた？」

「あー忘れてた！」

最近、いろいろとボーッとしている。

「今日、俺も日直だから・・・」

横から男子が話しかけてきた、おおのひかる大野悠也君、スゴくモテるらしい。

「いいなあ～悠也様となんて・・・」

そんなことをボソリとつぶやく女子もいるほどだ！

「悠也君ってモテるんだ」

「そんなことない、好きな人は振り向かないからなー！」

「へえー、好きな人いるんだー」

「ああ・・・片思いだけど」

悠也君は顔が赤くなってきたらしく顔を下に向け隠す。

あと、田直の仕事は次の授業の用意をするのだ！

次の授業は理科で結構重い実験用具を一人で何個も持つのは大変だ。

「あつ、重い？持つか？」

悠也君は、重くてフラフラ歩いていた、私に気づきつつ。

「え・・・あつだ・・・大丈夫！」

なんで好きでもないのにドキドキしてるの・・・私のバカ！

「そろそろ効き田が出てきたかな・・・」

裕也君はボソリと何か言つている。

「奏さん……つて……」

「あつ奏でいいよ！」

な・・・零以外その言い方は・・・

悠也君はなにやらガツンボースをしている。

—奏　・　・　好きだ！」

レポートに提出する「自然」メンタルヘルス

卷之三

なんて口にしてるの？和なんかおかしい…

サガリヤが俺のお父様！」

卷之三

あーそうう、奏は少田から俺のものだ！」

いきなり意味がわからなし……ていいかさうきから頭がモソモンモソしている。

「えっ・・・悠也君の・・・ありがとう! とっても嬉しい!」

悠也君は笑ってる、どうしたやつたの・・・私も悠也君も！

「そりだ！ 零には嫌いとでも言つて縁を切れ！」

ヤダヤダヤダ

「うん！わかった」

キンゴーンカンゴーン

体が話の事を聞かない・・・零に話しかけたりどんな」とを囁つ
か・・・

「どうしたんだ？奏？」

零が話しかけてきた・・・ダメ私一言ひちやダメ

「嫌い・・・私、悠也君と付き合つことになったから」

なんてこと言つてゐるの・・・

「なつ！奏それ本氣か？」

本氣じゃない・・・なんか変だよお操りられてるみたい

「うん！本氣だよー！」

私のバカバカ最後にかけよつ・・・

「た・・・助け・・・て・・・零」

やつた、ちょっとだけだけど言えた。

だけど零は険しい表情で氣づいていなによつた。

キン「ーンカン「ーン

授業が終わる。

「奏、一緒に帰らう

零は言ひつ。

「ヤダー！」

なんてこと言つてゐる私のバカ

「奏、帰らうぜー！」

今度は悠也君だー！これは当然やー・・・

「いいよー帰らうー！」

なんだこの差別みたいなの・・・零・・・

帰り道

「そうだー！奏、俺のー」とは悠也つて呼べー！

「うんー！悠也ー！」

今まで零しか呼び捨てしたことないのにー！

「俺の家で遊んでから帰るわー。」

「うんー超うれしい

超イヤだ！

悠也君の家

とても豪華だ！

「俺の部屋で一人っきりで遊ぼうぜー。」

悠也君は家中に入り結構、奥のとても大きな部屋に入っていた。

「うんー。」

ガチャ

そこにはたくさんの絢爛豪華な調度品などが置いてある。

その中でも一つ、黒くちょっと不気味だけどなにか引き付けられる感じの黒の真珠のブレスレット

「あーこれこれはね秦とお揃いでつけたくて買つたんだ、つけてくれるかい？」

「うんーとっても嬉しいー。」

私が思つてもいなことを言つと悠也君は一いつと笑う。

私の手は勝手に動きプレスレットを掴む。

「奏！それはダメだあー」

零だった、これはいけない物？

だが、零が来ても私の手は止まらずつけてしまった。

これは私の声だ、頭が悪で占領されていく・・・・イヤだ、もう、イヤだイヤイヤイヤ

「やめて・・・私はそんな争いなんか見たくない、したくない、零
を傷つけたくない戦いたくない笑い合つてた敵なんかイヤだ私は私
は」

「奏、戻つて来い辛い過去だろうが何だろうがすべて俺が受け止め
てやる！」

「零、ありがとう、ありがとう」

「奏……チツーお父様の命令ビリつしたのに結局ダメじゃねえか！」

「う・・・・う・・・・うわああああああああああああああ」

再び激痛・・・悪の力が強まる、きつと悠也君の感情と繋がつて

いるのだろ。

「奏ー！大丈夫か！」

「助け・・・助けて・・・ハアハアに・・・逃げて・・・逃げないとまた零と戦うことになる・・・だから・・・」

「イヤだねー俺は奏を守る・・・そう決めた」

「零・・・」

悠也君は諦めたようにプレスレットを壊す。

悪が消えていく、心がホッとしてきた。

「零、悠也君、ありがとー！」

きつと今までにない最高の笑顔だつただろ。

零と悠也君は顔を下に向けた。

第一一十五話 夢の中へ

「零、悠也君、ありがとー!」

きつと今までにない最高の笑顔だつただろう。

零と悠也君は顔を下に向けた。

次の日

私は零と佳奈さんと葵さんと学校へ

「奏、昨日、大丈夫だつたか?」

「うんー!零が守ってくれたからー!」

「何の話ですか?」

「何の話をしてるのだ? まぜてまぜてえええーーーッ!」

零君は佳奈さん達に何も言わずに私を助けに来てくればらしく佳奈さんと葵さんは昨日の出来事は知らない。

「秘密だよーねつ、零ー!」

「あーーー!」

昨日のことは零にとつて最悪の日であつて、私にとつても最悪の日だつたし誰にも言いたくないのは零も私も同じだから秘密にする

ことにした。

「教えてくださいよおー」

「教えない」と・・・

佳奈さんが脅すが零に叩かれて佳奈さんは反省した。

学校

キンコーンカンコーン

最近、骸骨・・・じゃなくてプシュケーも現れないで平和だ。

「今日は転校生が来ます。」

今年は転校生が多いな、と思いながらも私は零のほうを見る、零

「中村朱莉です。よろしく・・・」
なかむらあかり

ん？ どうかで・・・。ついでからビの見ても結花じゅん！

「ハア、また敵かあー」

零がボソリとつぶやく。

結・・・朱莉さんは廊下側の一番後ろの席で移動していくときに「チラチラ」と見えた、やっぱり結花だよ。

キンバーンカンバーン

朱莉さんは休み時間なぜか・・・つて敵だからだと思つけど私のところに来た。

「奏さんって私に会つたことある?なんかなつかしいって感じで・・・」

「えつ、会つたことは・・・ないと思つよ」

他人だつたら・・・ね・・・

「奏ー」

零が私を朱莉さんから離す。

「また、変な」とになると厄介なんだよー!」

ボソリと零が言つ・・・きつと心配してくれたのだけりつ。

「奏さん・・・零君つてカッコイイですね、私、一目惚れしてしまいました」

えつ、零を・・・

「そ・・・そなんだ・・・アハハー」

私は誤魔化すように笑う。朱莉さんはその不自然に氣づくが言葉に出さない。

「ねえー零君つて付き合つてる人とかいるのぉー？」

私と話してゐる隙に入つてくる、本当に好きなの・・零のこと結花あー・・・

零はその質問に顔を真つ赤にする、私が目の前にいるもんね・・・。

「そつか、いるんだ！誰？」

「か・・・かな・・・」

「えつー・奏さんー！」

朱莉さんはグサグサと質問しグサグサと当たっていく。

「奏さんー・今日から恋敵ライバルですー！」

「くつ？」

良く分からぬー・・・結花・・・じゃなくて朱莉さんは零のことが好き?なの・・・

朱莉さんは私をギロツと睨むと朱莉さんは自分の席へ向かつて、何かを取り出し、また口チラに戻つてくる。

「じゃあ、零君ー・私、コレあげるー！」

そこには黒い紐で作られたミサンガ、ただのミカンガには見えなかつた、何かこうつ・・・黒々とした何か・・・

「奏さん？」

晋吾君だ！

晋吾君は私の手を掴み廊下へ引っ張る。

「ちょっと零が・・・」

ダメ零あれをつけたら・・・

「奏さん・・・ボクからのプレゼント・・・つけてくれる？昨日の
お詫びで・・・」

そこには虹色の紐で作られたネックレス・・・きれい。

「え・・・あっ、うん」

私はそれをつける・・・な、何これ・・・なんだか眠く・・・

バタン

葵

「奏さん！大丈夫ですか？奏さん！」

奏さんは廊下で一人、いきなり倒れたらしい・・・

「奏さん！」

零君は朱莉さんと楽しく話している……どうせやったの皆ー。

零

「奏さん！」

クッ・・・奏・・・これ奏も昨日、体験したんだな・・・結構辛
いな・・・

「ねえ零君・・・私、零君と一緒に私の家に住まない？」

「ああーいいな！朱莉の家、見てみたい！」

なんだ俺！てかなんで呼び捨てなんだよ！馬鹿！敵だぞ「コイツ

「なんか、騒がしいから校庭いこつか！」

「ああー・・・」なんつるをことじるより、朱莉と一人つきりで・・・
・

なんだこの俺のバカバカバカバカバカ

奏

「何処だらう・・・

私はどひつてこんなところだ・・・

「は、天国？地獄？・・・それとも・・・

これは夢？私って誰？名前は？生年月日は？歳は？・・・わから
ない・・・

ここは・・・何処?

私は文字だけの世界に一人ボツンと立っていた。

なんで誰かい私の私は……ここで一人でずっと生きていたの？

卷之三

何の音

地面は砂なので、下へと落ちて、アリ地獄のようだ。

アサヒ・ジャム

ここは何处？

そこは砂だけのところ、一人の男が立っている。

誰なの?」「何処なの?教えてよお!」「?あなたは?

田が覚めると、そこは田園だった。

私は…奏…今のは夢?」

ハハハハハハハハハハハハハハ

王の椅子には一人の女・・・この人は誰?なの。

「そこの庶民よ!私、プシュケーの前だ!ひざまずけ!」

第一十六話 王女様とのトーク！

「そこの庶民よ！私、プシュケーの前だ！ひざまづけ！」

プシュケーと名のる少女は、たぶん私に命令しているのだひつ・・・
・プシュケー？ん？あの骸骨の・・・

プシュケーは女？それとも同名の人なのだろうかつてには日本
じゃないの？プシュケーつて！

「そこで何を突つ立つておる！私の前じや！無礼者は処刑場に連れ
て行くぞ！」

しょ・・・処刑場？えええー私、殺されるのだけはイヤだ！

私はそこに正座をする。

「なんだ！その座り方はー庶民は庶民らしい座り方があるだひつー・

庶民らしい座り方？つてなんだよ！

「プシュケー様！クーロ様が来ております！」

「クーロが！」

プシュケー・・・様？がクーロ・・・様？つて人？が来たと聞く
とプシュケー様？は王の椅子から飛び降りどこかへと走つていった。

「お前！名前は？」

後ろからそう聞かれ振り返ると零に超そつくりな男の人気がたつて
いる。

「えっと、か、奏です・・・」

「カナ『テ』?」

あつ！そつか！現代社会では普通だがここではカタカナの名前が
普通なのだろう。

「あつ、えつとアポロンです」

とつさに思いついた私の中にいる女神の名前、アポロン・・・な
んか『ermen』。

「俺は、ゼウスだ！」

ん？ゼスが零だったから・・・その親？

「あの！お子さんっていますか？」

「ん・・・ああーゼスなら『るゼー』！」

「い・・・今、何歳ですか？」

「一歳」

えええええ・・・でも神と人間では神のほうが寿命が・・・え
え！じゃあもしかしたら今の零は私より年下？

「えー！あのゼス君は人間のほうの寿命ですか？神のほうの寿命ですか？」

「残念ながら人間だ！」

「いやいやー、じゃあ私、喜びますよー！」

「今、どこに？」

「人間界だと思うが？」

おおーナイスだーーそつかお父様は王女様に仕えてるのですねってプシュケーーことはここは悪？の組織の場所？

「えつーーあのおじ様はココで何してんですか？」

「ああーマル秘つてやつ？」

「わ・・・私！ゼス・・・零と友達で女神が入つてて、ココになぜかいるんですよー！」

「な！・・・逃げろー！お前も道具になる！俺は身分を隠して侵入しているんだぞ！」

なるほどーさすが善の人だ！

「何をしている！私の獲物だ！」

私つて獲物？

「えつとだ女神入りの娘と！私と手を組まないか？」

「骸骨のときとだいぶ性格が違うね」

「ああーあれは仮の姿っていう感じだ。」

「な・・・そんなことないぞ！」「ならすべての者を従えられる」とができるーー元しかなことだ！」

「プシュケーはそれで満足してゐるの？」

「ああー悪いか？」

プシュケーは王の椅子に座る。

「なんで自分が満足して他の皆を傷つけるの？」

「私は・・・私は、神になんかなりたくなかつた、神にした人々は私を傷つけた！そのお返しだ！」

「神になつた？」

「あなたは元々、神じゃないの？」

「お前には関係なかつてーー」

「そつかプシュケーも黒幕に自分の感情でかられたんだ」

「どうこう」とだー

プシュケーは身を乗り出し言ひ。

「だつて、そんなことを考えてたら誰かにこの仕事を頼まれてそれでただ満足してるんでしょ？」

「ちがツー私はただ私は・・・」

「私は?」

「・・・いいじゃん!仕返しごらー」・・・

「ぐりい?あんたのせいで私だつて危ないことになつたし、学校の皆も巻き込んだんだよ!分かんないの?自分が傷つけられたら、もう傷つく人がいなくなるように努力するのが普通なんぢゃないの?」

私は必死という感情を顔に出す。

プシュケーは涙目になつてゐる、誰にでも感情はあるもんな、少し言ひ過ぎたかも・・・

「IJの者を処刑場に連れて行け!」

ええー処刑つて逃げる気!

私は牢屋のなかに連れて行かれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5478z/>

女神しか知らない恋の道!??

2012年1月10日21時46分発行